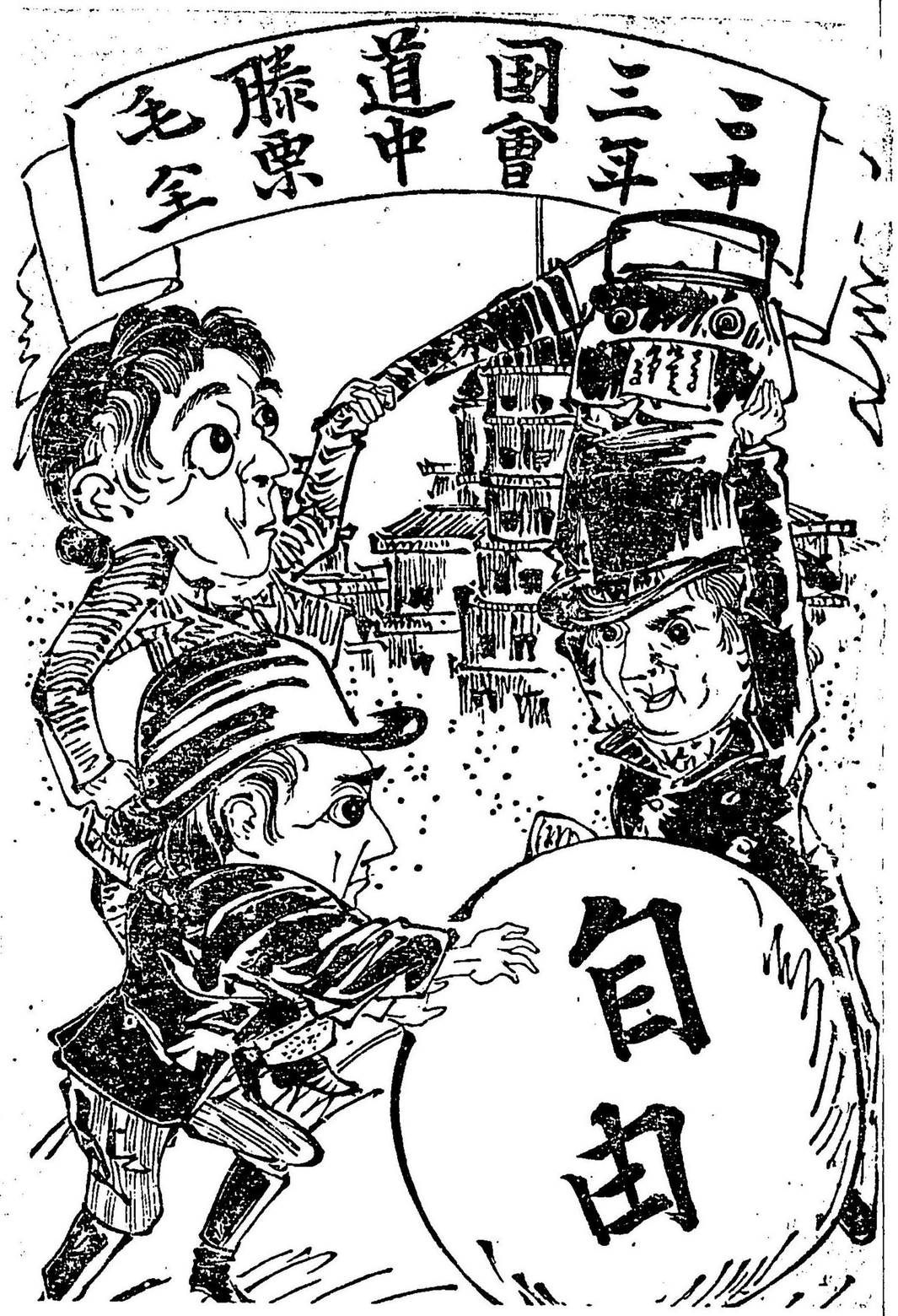
二十三年國會道中滕栗毛全
自由

No.6742

○自序

颯々タル凄風ヲ受ケ凜々タル霜雪ニ逢ヒ他ハ皆凋萎枯朽スルモ楚葉亭幹幾百年ノ後ニ至ル
モ巍然トシテ毫モ翠光黛色ヲ變ゼザルモノアリ何ゾヤ曰ク只松樹ノミ峭々タル激波ヲ享ケ
ル怒濤ニ擊タレ餘ハ悉ク破碎漂消スルモ特リ突屹隆起數千歳ノ時ヲ經ルモ依然トシテ
存スルモノアリ何ゾヤ曰ク巖石ノミ此松樹ノ性タリ巖石ノ質タル二ナガラ人ヲシテ
其氣豪ニ感ゼシム豈ニ又偉大壯快ノモノナラズヤ夫レ我日本全國ニテ明治十七八年
頃ヨリ明治十九年ニ至ル迄ノ間ニ有志者ノ相結合シテ政黨政社ヲ團結シ數ハ殆ド枚擧ニ暇
アラス近者其結合ヲ離散シ或ハ解散セシメ其痕跡ダニ殘サヾルニ到レリ此レ靡不有初鮮克
終トノ古語モアレ共敢テ咎ムベキナシト雖モ苟モ世ノ公益ヲ計リ開發ヲ希フヲ主トスル民
權家ニシテ直ニ挫折スルガ如キハ抑モ又日本人ガ忍耐力ノ乏キニ因ルト謂ハザルヲ得ザルナ
リ西哲言ハヾヤ生テ奴隷ノ奴ト爲ルヨリハ寧ロ死シテ自由ノ鬼ト爲レト味アル哉此言ヤ目
下世上ノ大問題ト爲リ衆人ノ着目スル所ノモノハ完全ナル國會設立ニアリ然リ而シテ內地雜
居條約改正之ニ次ゲ今本書ニ載錄セルモノハ我明治十七八年ノ頃ノ事情ヨリ稿ヲ起シ先ヅ
第一段ニ國會設立迄ノ道中ヲ巡覽セシムルノ旨趣ト爲シ第二段ニ內地雜居未來ノ事ニ說キ
起シ稿ヲ止メントス勉メヨヤ諸君勵メヨヤ諸君トアリノ儘ヲ記シテ卷首ニ換フト云爾

明治廿三年ノ四年前菊月廿又五日

在大阪中ノ島自由館自烈亭樓上ニオイテ

自由散人識ス

三十年回合道中膝栗毛

香夢亭山櫻著

○第壹編

人の心も街衢も自然と廣く開け行く東京市街の繁昌は八百八町も四里四方と日に新らしく建列ねし煉化造りや石室の巍々と擢く瓦斯燈に深夜も跡絶ぬ馬車腕車徃來ふ人は織るが如く霞を籠めし和融好景柳櫻を濟ぎ交ぜし列樹に最ど賑はる此處は淺草須賀町の天王橋の南畔なる井生村樓より群れ集ひ何かの開散か八涙〳〵と歸れる人の百般に背の低きにも似も遣らぬ高き帽子を冠たるあれば或は片眼に双眼の眼鏡を掛けし輩もあり記者人言に醫者書生士族商個職人車夫裝賤雅俗の隔てなく老若男女の差別もあらず絡繹として出て行く中にひと際聲も高調子頻りに談す兩個伴は上水で産湯を遣ひし純粹の神田ッ子と言はでも知るき言語遣ひ「コウ〳〵自由さん些タア靜かに歩行ねへナお前郵便の配達人にでもなる積りか大さう迅い足ちやねへか　自「オオ〳〵民公雜沓の中で交ッ返しハ御免だせ　民「定めてさう言つたらお前が立留るだらうと思つての計略サ處で今日はお前が態々誘引に來て是非來い〳〵と言たから出來たもンの實は已等は演說と云ふものは囃子でも這入て居て演劇か寄席のやうなものかと思つて居たら糞面白もねへ已等が貸湔園の損料を滞ふらして鍛治橋内の裁判へ呼出された際の様に片脇に方にや警視の官吏が

並んで居て肝腎の演説遣ひ　自「コウ民公如何に物を心得て居ないトッテ見咎ねいぢやねへか演説遣ひデがあるものか彼方ハ辯士と云て自由主義のお人だはナ」民「うりやア辯士か辯慶か知ちねへが衣川の戰死を見たやうに高へ臺の上へ直立て耶蘇教師が狐に魅まれたと云梅鹽ーさに民權だとか東八樓だとか毛唐人の寐言とか藥舗の符牒のやうなをばかりを饒舌立て何だか巳等にや些とも判らなかつたがお前は愚意でもあるか時々自由〳〵テ呼て居たぢやねへか彼時にや何故お前は返辭を做なかつたのだエ爾〳〵て結局にや欠が出て來てそろ〳〵眠くなつた處からお前が一生懸命脇見もせず前方を向て聽て居た背後の方で思はずとろ〳〵と遣ッ付たのサ　自「オヤ〳〵演説を聽に往て眠むりをするとは實に呆れ蛙の面に水だ　民「とおろがまあ聞なせへ爾するとチ場中の奴も退屈〳〵て一杯遣り度なつて來たか俄に一同が手を叩き出〳〵て冷酒〳〵と吐鳴アがつたので巳等は吃驚〳〵て其音に眼が覺たのサ　自「眞實に做樣のねへ奴ぢやねへか彼贅成〳〵ヲ言つたのはその演説が皆なの人の思ふ處と同なし壺へはまつたから言はゞ至極妙々其の通りに違へねへと言て手を叩いたをヨ　民「さうかとおろが根が左利の巳等のとも云ふ此奴ア眼覺に妙だらち一番飲で遣ろうと思つて大聲を揚げコウ隊長後方へは退ねへ何時でもお出だ巳等も冷酒〳〵の方だから熱い燗なんぞで苦圖〳〵遣つて居るよりヤア速く遣ッ付て仕舞ふぢやねへかと言たら何か思ひ當つたなんぞあると云ふ容子で傍に居た鮑が八官町邊の新聞屋へ時々出張

（おろのを見掛る泥鰌ッ髯の生た奴が不平面を做やアがつて無ふく〳〵と言たからチャア最酒なつたをと思つたからぐびつく咽喉を我慢〳〵て何でも開散たら入合せに何所かで抔一箸ら吐をうと思つて居たに雜沓の中も搏はず駿々と遣つて行からヤットのとで呼び止めたんだ自由さん後生だから一寸此所等で極めて徃たら何なものだらう　自「拾錢の傍聽料を散財だ上面白なかつたから一杯奢れも能く出來た話〳〵だが實い己等も傍聽席の込ない中と思つて午前にお飯を喰て直と出掛て來た故か少〳〵く腹が減て來たから酒にハ至極なさるの尅とりでも喰て寛々とお前に話すともあるから今日開業の自由鷄肉此所の鷄肉屋へ登ると做やう　民「うれハ近頃ケッコウだと口から出任せ駄洒落を喇り両個は右ある鷄肉屋へ這入るに賣出〳〵とてひと層花美に給ら積物種々雜多甲家乙家より贈り來せ〳〵を場所狹きまでに祝ひかざりて樓婢樓僕ハ揃ひの衣類其盛大ハ言はん方なく千客去ば万客來りて錐を立つべき餘地もなく二階の隅へやう〳〵に以前の両個ハ坐を占めて誂らへ物も程經ず持ち運び來る即席便理献つ酬れつ盃盞と俱に醉さへ追々まはり倒の飄輕なひとりの男が燒鍋を掛たる火鉢を中に對坐の朋輩に酌を做ながら　民「自由さん此樓の鷄肉ハ新聞の廣告とか實烙とかに自由鷄肉と載てあるとお前の言つたが違へなーの眞中だぜ何故テばまあ鳥渡斯鷄肉を燒鍋へ入れると直ぐ自由〳〵て言つて燒るのハ何を强氣ちやねへか其處へもつて來て酒の酔が自由万歳とか言ふンださうで」猪口傾けても氣が爽快とした

何だか眼が覺たやうな心持になつて素的滅法に宜酒だ之なら上戸でも下戸でも日本中の人の口に適ないテ言ふとゝ滅多にやねへぜ米其上第一肌を脱うが丈六を組うが自由自在で例之本店の若旦那が入ッーやらうが谷中の和尚さんが來やうが一切構ふこタアなく此方の身体で此方の錢だから氣樂にーて味ひ物を喰てこそ自由の錢を遣つた甲斐があると言ふもので裸躰祖裼御斷はりと記て貼付た寄席や湯の中にて石鹸御無用と標示をーた洗湯なんざア些と穢に障るンだチ

兄弟一躰全体物事ハ斯往なくッちやならないのが此當だらうれにお前聞て呉ンねへ愚痴を溢ずちやねへが己等の處の家主の薬鑵なんざア岸田の精錆水を十二瓶ばかり挿て觀象臺の望遠鏡を借て來て覗いたッて見當の判らねへテ言ふ慾張一方の人足で出すをッテは迂濶に屁も放らねへが取入れるとゝ來た日にやア如才なく夕立がすりや隣屋の洗濯物でも世話を燒うて言ふ死損ねへだから最初移轉て往た際のいひ草からーて氣に入らねへのサ先づ通當一般の移轉なら長屋の奴等にやア十八番の蕎麥を配り家主へは西洋砂糖の一袋も遣つて置きやアまあ上等の分とーなけりやならないだらゝちやねへか處が面の憎いをにやア何所其處の店子達ア實に能く氣が付くさうで何時も移轉て來た人がありやア酒二升に肴を添へ餘分に細君さんへ菓子を一折持て行くさうだの彼處の誰ハ勝手が分りませんから失禮ながら其方で御適宜に頼ひますと言て平身低頭を斗て置た方が宜でさいーやうと言ふかと思ふと未だ乾かねへその舌を反ーて畢竟申さば隣家共が就会に不調氣な折柄もふ稍ゝ失費も掛けずにすむから長屋中への移轉蕎麥も附ずに済む

子の者等は眞の交際をするばかりだから夫で宜が偖家主と成と其とは討て替り箸の轉んだ拍子もそら印形と頭の頂上から足の爪先まで万事万端に手數が掛り大抵骨の折れるをだ知れやせ

ねへが其等ハ一ッ〳〵言はねへでもお前さんの方で能く御承知だらうからそら家主は家主だけ恐切に世間並の行屆けハ做さるだらうがうんなををーて貰つては恐縮入つて濟ねへ譯だから決ーて止てお呉ンなせへナカと子持て來いと言はねへばかりの影催促其上諸稍修覆と錢の要るとばかり續いて店賃の利益と差引勘定をーて見と取る方が遙か少くてさつぱり活計が立ねへから家の汚穢割にや些タア店賃が高からうが當分の中だから我慢をーて置て呉れ其代り少ーでも景氣が直りや早速壁も塗直ー店賃も必らず直下をするからと聞たくもねへ返照金剛で味く誤魔を摺りやアがつて久ーい間苛酷店賃を奪て居る言ばお花主お客等の已等だらうれを無料でも置てあるか何ぞのやうに屁とも思はねへで利た風な家主面をーて構柄張り煙草の間には長屋を巡廻つて見るを聞くとに苦情を吐散ーヤレ路次の掃除が行屆かねへの夜は不要心だから九時限りに表戸を閉ろのと好出放題を吐露た揚句同じ店子の其の中でも何か家主の憤怨に觸れねへやうにとおもつて南瓜や芋の雑菜でお鬚の塵を拂つたりイヤ中元の祝儀だの歳暮だと苞苴を持て行

く阿諛連中にや頭も低くちやほや言つて愛想が宜が巳等のやうに朝晩顔を突出して居ても厚い
憲いの挨拶も做ねへ者にや他所に貸店がないか何ぞの樣に何樣非道いとをしても移轉て行ねへ
とでも思つて居やアがるか輕蔑扱て犬猫同樣の扱ひ方そんなら錢ア取らねへのかと言やア何し
てくさうの所ではなくお前三日に上げず何神社の屋根替の寄だの町内の誰の花會だのと言つ
て周旋料にでもなりさうなとは道さねへで骨を折り强諭に勸め立て出さうとも做ねへのを家主
の威光で壓制に否應言わさず錢ばかりフン奪つて置て壁の塗替は措置き店賃の直下を風諫すり
やア聞ゑねへ振をして濟し込んで居やアがるとは何と鐵面皮さの底の知れねへ馬鹿欲の深へ鈍
痴氣野郎ちやねへか當樣の親方の樣に純然開けた人なんぞと比較て見りやア鞠ッきり水鷄と鶯
ほどの齟齬だらうぢやねへか　自「ヤイ〳〵馬鹿のとを言ひねへナそりやアお前鷲と烏テ言ふン
だわ子　民「オット違へねへ恐皆とり違へて表裏反覆を言つたナア恐れ入間の里訛りか子ハ、、、
再たが當樓の親方も大さう自由とかに熱く凝り固まつて居ると見へる子　自「さうさ巳等が前廷
お前に話しがあると言つたのも矢ばり其自由に付てのとだが今お前が家主にあたまおさへにば
かりされて心の裏ちやアエ、糞いめ〳〵と思つて居ても言ひなり次第に御無理御尤もと雖
ゆと畏まつて小理屈のひとつも言ふとの出來ねへテ言ふのアれ今の自由テ言ふとや權利ス自
分を能く辨別て居なわれのとで巳等の眼から見てせへ實に憫然千万氣の毒至極に思ふン
然ればやう為ねへ馬鹿人間　民「ヨウ自由さん大
きう惡くこなすぢやねへか　自「まあ無言つて聞ねへナ馬鹿人間の呑子の酒蛙突ばかりが集を組
んで居る長屋だから家主との出來ねへ樣なものゝ若し店子の中に三百代言だとか或は易者講釋
師テな者が一個でも居やうならそれこそ少しア舉丸を提たらしい生根魂魄があつて世の風潮を
も意を注ぎ今日の形勢にも眼を着て居るゆゑ自由や權利位のとは傍訓新聞を讀でやも知つて居
るから忽地苦情を鳴らし出しそれでは無法だ非道だと不平に堪らねへから長家中を呼び集め斯
でも無からう彼でも無からうと段々店子を說き勸めるに至當の理には誰しも靡き易く成程さう
だと店賃の直下をして呉とか左もなくば家をきれいにして呉と言ふをいゝ入れそれでも承諾
ぬ揚句の果は親にまで譬へる家主の恩も苛酷思ひをさゝれた返報憎さが百倍と騷き出して打擲
殺せの家を壞せと容易ならぬ珍事を惹起すは鏡に掛て見るやうだが斯言ふ類ひは吝な家主の頭
おさへになる計らひをする小さなとばかりでなく大きく取て詰す日にや現在佛蘭西や其他にも
隨分此例のあるとは些と柄にない高慢らしい話しだが之と言ふのも過般から解らないながち
にも一心不亂に新聞雜誌を閲たり演說討論などを聞た餘光だ巳等の樣な人偶の棒でせへ自然と
九　智識とやらが開けたと言ふものか追々事物に會得の行くのは何と難有てへものじやアねへかね
から未だお前が暗夜に提灯を消て仕舞つたか杖を奪られた盲人同前左右前後へ一足も蹈み出す

この出來ねへやうな六道の辻の我利〻く朦者社會を天にも地にもない樣に思つて消光て居るのが憫然もの云一日も速〻雲霧の晴れた自由の明るい世界へ導ねて遣らうとの老婆心から態々お前を誘引に廻つて井生村樓へ出掛た譚サ處が自由政談演說などを始めて聞ちやア解るめへが一度よりやア二度十回より廿回と聞くに從ふて腹に落入るからまあ當座の中は傍訓の自由の燈テ言ふ塚日發兌た書入新聞でも購て讀なせへ爾ーて前き演說テ言ふものゝ演劇か寄席を見たやうなものかと思つたを言つたがお前が面白いテ言ふ演劇は從前在來の脚色にて時代物や世話物だらうがそゾシテ貴小僧は强勢なものだ己等も彼樣になつて見たいと野蠻な奴に泥棒根生を萌させたりイヤ丹次郎は美麗い藝妓の惚れるも無理ちやねへ彼言ふ情郎と添つて見たいと箱入娘を浮氣者にする樣なとがあるからそんな人の風儀を亂す媒介となる見苦〻い狂言は一切お廢止にしたいもので同〻演劇でも昔日は憚かる處があつてか眞且事實を書なかつた今度の市村座の民權演劇などは例の古賀家の團十郎が滑い好みの義人宗五郎で百姓の塗炭をその身一個に擔當て救はふテ言ふ義心から妻子の歎きもふり捨て犧牲となる日本魂吶直訴をする段の思入は無慈悲な官吏の壓制を慷慨小ねをだ悲慣ーいをだ最耐忍が做切れねへテ言ふ勢色が容貌に顯はれて眼玉の皿走て居る處なんざア實に演劇を見て居る樣ではねへやうだが元來人間と產れた限りにやア樂位の樂樂は持つて居なけりやなちねへのが當然で業外掌小室信介さんが編輯した東洋豪傑

業績を官吏は共五郎を見たやうな類ひの至極感心な人〻の故郷ひい名が是まで世に埋もれて居ゆたのを美〻く調べて訓集めた冊子だが未だ三ツ葉が涙を利ーたズツト開けねへ封建時代でもへさう言ふ賴母子い人が澤山あつたのだから況てお前新聞だの學校だと智慧も開け道理も辨ふ易い機械が出來て女の兒も我輩はと演說をなー乳を探す赤ン坊も糸犬鏑と諱誦をする文明開化の今日だもの華族だテ官員だテ士族だテ平民だテ日本の戶籍に何の某ーと姓名の載て居る以上は三千七百万の同胞分なれば一個も他人とも思はねへで國の爲めや社會の義務とならば財產も拋ち家屋土藏も打捨つて仕舞位は愚かなを仮令熱鐵を呑され一寸斷みに斷まれ一家一族共に亡果るやうなとがあるとも猶もおめず膽せず飽まで一分を盡さなけりや國へ盡すテ言ふものじやねへがそれに何ぞや自由だの民權だのと眞直過る程なとを言出すと虎か狼みのやうに怖がつて無暗矢鱈に忌がる者があるとは何と交誼甲斐のねへ薄情なとで万物の靈だとか名ばかり威張散ら〻人間の皮を被つて居る効能て言ふものは蚊の泪ほどもねへぢやねへか卑屈の隊長怯夫の行止りとい斯な人足のをだらう殊に自由テ言ふ正義黨が一度世に立てより見やう見眞似に彌次馬連が自分の慾張半分で止せば宜のに痩肘を張り何だの角だのと種々百般な擬黨を設立つ難有やの講中が勸化に孤るやう辯舌に任せて勸め立るに狹隘樣でも廣い日本偶にい〻得違ひの者があつてその口車に汪惘と乘り擬黨を此上ねへやうに思ひ首を突込む輩もあるさうだがそんな

擬寮が宜と見誤づて加盟る奴等が恰度お前の言ふ昔日の脚色の時代物や世話狂言の卑劣演劇を

一 見て喜んでゐる愚物と一般又寄席だと言つても講釋にや近來の義民仁人の新説美談や淨瑠理に

二 や淋漓の墨坂だのテ言ふ新作物の臆分感心するのも出來て居るが幾程面白くても此方の間違が

違つて居ては厩の衝張にもならねへから總て寄席演劇に限らず能く意を用ひなけりや一生頭が

上らねへテ言ふやうなものサ 民「ンナアーる程さう細かく事を解て話〜て呉ると巳等にも能く

解つて來て自由や民權て云ふ固ッくるーいをは入らねへと思つて居たは如何にも誤まり今わら

心を入替て屹度勉强をすると做樣就ちやあ斯云ふと慣るかも知らねへがお前は見掛に寄らね

へ大さう博学だから序に鳥渡尋ねるのだが最六年經つと現世が轉覆るテ云ふとださうだがそ

れは一体嘘だらうか眞實だらうか 自「他にものを聞くに混淆すテ奴があるものか然ー知つて居

るだけのとは話ーて聞ずが何も現世の轉覆るテ云ふとはねへンだ明治二十三年になると御政

事向が立憲政体テ云ふのに變つて國會テ云ふが開らけ彼人ならば何事にも如才なく至極確實だ

からと日本中の人が代人を撰んで國會議員に頼み其人達がお互ひに見込通りを云つて見て仮令

税金が高くならうが廉くならうが言論や出版の自由て云ふが許やうが許なからうが其他万事万

端頭數の樣山方處の評議を取つて勅と決め勿体なくも 天皇陛下へ一應御覽に供へ御允可を受

ケ上で始めて世中へ御布告をなつて出る譯でそれを公議輿論を云ふさうだが現世が轉覆る

ずに云ふ禮の大變を區ぶこちやねへンだ時代に自由主義の人達の見込が加勢する者

が多くて他の擬寮の云ふことが引立ねへやうに勢力を占らなけりやならねへと今から其の準備を

して向ふと競爭て居る始末だから何でも早く自由テ云ふ純精正義の政黨へ加はり奴隷だの卑屈

だのと人間でねへやうに云はれる社會を脱けて無けりや無ながらに身分相應の力を盡さなけれ

ばそら今も云つた國の爲めや社會の爲めに一身一命をも打捨て仕舞つて骨を折るテ云ふ深切な

志士達へ義務が立ねへちやねへか 民「重々尤もお前の云ふのに違へねへから早速自由主義テ云

ふへ加盟たいンだが巳等のやうな頓馬でも入れて下さるだらうか 自「アヽとも入れてくれるも

くれんもあるものか自由主義になれば何も怜悧子でも頓馬でも力を盡ー骨を折らうて云ふ精神

にや些とも變つたとはあらーねへ 民「其奴ァ何よりだから宜ーく頼むシタガテ段々話ーを聞て

見ると何だか身体中がむづ〜〜とーて自裂たくなつて來たから何と一番二十三年の來るのを壯

然と待つて居ねへで其の國會テ云ふへ此方から押掛て往たら何なものだらう 自「それは近來の

大舊觀で至極面白い勘考だお前がさう云ふ了簡なら巳等も出掛て行く氣だから早々旅費を工面

して短かいやうでも未だ長い四年間の國會道中を自由の旅の両個伴れで其の途次の名所名物の

一 猫すげ穴を探りながら緩々歩るとと做樣と氣鰾同士の話ーも適ふて頓に相談の調ひー折柄傍に

三 掛ある柱時辰儀が十時を報るに回顧り 自「オヤ〜〜最十時だ思はず話ーに身が入て大さう長く

尻をーたコウ民公そろ〳〵御還幸とーやうオイ樓婢さん〳〵書付だと勘定を拂ひ濟ーりの樓婢に割錢の小札を櫛頭に遣つて両個は階子を下りて行くを樓上から樓婢が　婢「三千七百番さんお歸りーとの聲に應じて下足番が景氣能く　下「毎度難有うございさうならお歸りなさいお靜かに在らッーやい

○第貳編

夫れ天地は萬物の逆旅光陰は百代の過客とか長い浮世の夢路をば短かく締める生命の洗濯をする皺延ーー興深いとは朝に見て佳味は宵に食はぬと月に叢雲鼻には辛子泪と共に眼の玉も飛び出すやうな思ひをすれば寢てゝ果報を待て居ず一寸先の暗の夜も燭を秉てたどるが文明速く行くのが開化な世の中然れば自由兵衛民八の滑稽者の両個伴も時世に遲れて舊弊心から菅の小笠を蝙蝠傘に柳行李と手提にカバンと昔日に變へし身裝束に自由の旅の國會道中野面は五形菜の花の今を盛りと榮ふ塡及臧むる莊子が蝶ならねど夢かうつゝか幻ーかもめか頑固坂下の荷弊寺判前結髮新道の茅屋をば飄々とーて鹿島立さーて前途も最長き春の日なみの麗かに岸邊に寄る迹みは宛がら岩間をこそぐるに似て霞の衣服綻びー山は笑へる風情あり村童の牧笛漁夫の棹歌の蹤打つ砧に拍子を交へて偶然なる節の鄙ぶりも耳馴れねばまた面白く遠き堤に柳の糸の長く枝れて眠れる形容の因循たるに反對へ遙かの空に雲雀の聲を限りに嘯喇叭顯達有氣に飄揚りて新

鑑ある人も愉快よりも和歌に就きて名所を尋ね詩によりて古跡を訪ふ風流韻士は更にも言はず無雅俗客も杖を止めて暫時精神をうつさるゝ一眺千金の風光絶景撮新師も硝子板を投げ油絵工も筆を捨るばかりなり右ある道の傍にい鬆鬱とーて生茂りー古松も日除に代たる茶店芝生の上へ二枚の手織の莚を敷列らね黒くいぶりー茶鐘をば枝より自在に釣下げて茶受に商ふ菓子の形は桃靈芝と仙人めきー主個の老爺が物數寄顔浮世の塵も搔き集めー水の葉を燻る罐茶の下のほる煙りを前刻から草臥足を臥摺居りー民八が疾くも見て取て　民「オイ〳〵自由さん今朝から强勢奮發た故か大さう勞れて來たが何と一吸遣つて行うじやねへか　自「未だ一日路も歩行切らねへで勞れて來たもねへもんだりんな意氣地のねーをちや体よく止た方が宜さうだぜ　民「ナアニ己等ハ國會へ行着くまでは假令兩足を歩行減らーに失なーて仕舞て田之助の二代目になるとも微苦ともするのちやアねへンだ今言たのは何やらお前が勞れて來て休みてへテ云ふ腰付だが己等に遠慮をーて我慢をーて居るのちやアねへかと思つて氣を利ーて云て見たのサ自由さん何も拵うてタアねへからずん〳〵と休みなせへ　自「それと此方から云ふとだ宜加減に人を馬鹿にーて置きねへナ　民「其樣眞實になつて怒られると閉口だが實の處とお前が景色が好とか旅は春に限るとか云て淵り面白がつて居るのに己等は足に豆が出來て滿足に歩行とも出來ねへ始末休らと云たッて休んちや呉やーねへシ按摩利いめ〳〵ーいと思つたから腹癒に一寸云つて見たのサ

あ腹を立ねへで已等のとも少ーア察ーて呉ンねへナア、旅は愛もの辛いものだ　自「そんな御苦ーいのならさう云へば宜に何時でも休んで遣るものを　民「ちやァ近頃のお願ひだから此所の茶店で一吸ーて呉ンねへオ、爺さん好天氣だ子「これはお出なさりませ眞に結構なれ天氣さまでサアお茶を一喫召上りませ　民「オット難有てへオヤ〳〵爺さん之は麥酒なのかへナニ茶だと滅法界赤い茶もあるもンだ近來横濱で毛唐人が買て行く紅茶とか云ふのは斯な色でもーて居るのか知らねへテ何ーろ已等は自由主義の日本屋民八テ云て廣い地球中に誰一人知らねへ者は無へ位の茶器〳〵だから茶なんぞでも廉價ぽいのは一切呑ねへのサ先づ大抵平常用の物が通の山水で玉露テ云ふ一斤十圓もするやうな奴を呑で居るから茶て云ふ物ゝ悉皆山吹色がーて居ると思つて居たンだ嘸が馬の小便擬ひのこの赤茶には恐れ入て仕舞た子ー自由さん　自「味く云ふぜ歩行かすと四文の直打もねへ癖に口と大さう達者じやねへか爾ーてれ前一斤十圓位の茶と云ふのを競進會でゝも見たをがあるのか　民「異う爺さんの辨護をするぢやねへか已等だつて見たとはなくても呑で居らア子　自「年問年中白湯ばかりあるか子、、、時に爺さんや是から先の路程舊發驛までは何程ばかりあるか子　爺「最四里に足りません道でございますからお早くお着になりますす爾ーて貴郎方は御定宿でもお座いますか　自「ナニ別に定宿て言つてはねへンだが何ぢ子爺「宿が一潔宜たらう　爺「さやうでございます種々と講宿も御座りますが其中でも抵當講社の子爺「一時は餘程華美に遣り掛けまして外面からは鳥渡堅いやうにも見へましたが根が快樂の連へ同盟者で客の爲めや講中の永續は少ーも思はず唯自分達の慾徳になることばかりに眼を着け金滿家などを見た日には低頭平身ーて奉り無暗矢鱈と阿諛を致すやうな最淺猿ーい了簡でございますす故段々世間の風評が悪くなりまーて命の綱と頼んで居た肝腎要のお客筋からも左のみ難有い御茶料も下さらなくなり何にも持切れません處から終に一昨年講社の同盟を解いて皆な閉店を致ーて仕舞今は跡形もなき哀れな恣其他改新講と申すもございますが否最是とても別段對ーたとでもございませず先づ彼驛中で直正で懇切で堅固ーてお客さまのお爲筋にも至極宜ーくございますのは民權擴張自由講の愛國屋と申すのが一番宜ーいと存じます　民「ハ、アぢやア何か子自由講の定宿が大黒屋で其他の講宿が悉皆野蠻だと言ふやうなものか子　自「銀座の薩摩屋の廣告ぢやねへがそら出た又出たお前の頓馬にや眞實に世話が燒切れねへヤ今爺さんが言たのは大黒屋ぢやねへ愛國屋だはナ　民「ゝ、きのへねへ全く已等が聞損なつたンだ　自「ホイ〳〵蒼蠅をだ十八番の馱酒落か子已等は最病らいさうだから何かそれだけはぬきにーて貰ひてへものだテ時に爺さん該驛の先は何テ言ひます子　爺「諾該驛から新街道が両枝に裂れて居りまーて右へ行れば漸新道左へ行れば民權道と申ーますが漸新道の方は曲り屈つて迂遠くそれに先來噴出た苗怪珍峯だなどと申す大山が連なつて居りまーて深く雲霧に打覆はれ天は始終に曇り勝泥濘路の

歩行も難く今にも崩れ掛りさうな危殆形勢好んで通る人とては少なうございますれば自然と往還も衰微致し今では新道を開いた甲斐は少しもございませんが打つ變つて民權道の方は街道も廣大て眞正で其上馬車腕車に瀛車と種々便利なものが出來て居りまして道行くには此上なし殊に電氣燈より猶明るい自由燈と申す街燈が立てございまして暗夜も白中を欺くばかり蟻の這ふまで見透る例の少ない民權道未だ見ませねど風評に聞て居ります英國の倫敦や佛國の巴里とか申す文明な土地もこれには及ぶまいと思ふ程でございますれば日增に繁花を極めまして「これは〳〵盛大なものでございます又道をお出になりますと其の先が慷慨驛と申す所にて驛内の廣園地には自由の爲めにお亡なり遊ばしました愛國志士方の記念碑や悲憤の涙時雨の櫻など申すのが御座りまして平常群集の人は絶ませず園内の割烹店鶴鳴亭と申す方では極熱い泥海で漁つた魚さかなの料理が名物でございますがまあ食上つて御覽なさいまし俚言に申す通り名物に佳味なしとやらで餌は澤山食つて居りますが否早頓とお話しになりません不味魚で其山椒醤油で煮て出しますまあめしあがつて御覽なさいまし 自「成程其奴ァ愉快な話し仮令魚なが不味にしろ食て見なけりやならねへもンだシタが民公宜加減にしてうろ〳〵出帆と做やうコウ爺さん此所へ茶料を置くヨ 爺「これは〳〵澤山に難有りございます左樣なら御機嫌さま宜しうとの主個が勘定を後に殘し兩個は其所を立出て淘たぐり行く新道銅刺樹を過れば原田圃縄手に蛙の鳴聲にける抑も當驛は其の名に背かず仮令民權を執て行くもまた漸進を廻り行くも各々此所より異を分ちて熱量の方へと志望す國會道中の第一驛前途を決める根據にして自から旅客も多ければ從ふて驛も賑はしく軒を列べて旅籠屋の自由改新保守守舊と主義無差別の講社の看板互ひに我田へ水と競ふて樹に餅の生る勸め口演惡は習慣の宿吏が何でも味く引込ンと天窓を搖き〳〵小腰を屈め客を捕へて口〳〵に 因「へィ〳〵れ宿りさまではございませんか保守講の御定宿因循屋は自分方で御座います明朝は成丈けお早く致しますろらお宿にはなりませんか子 固「これはれ客さま失敬と貫郎方さまは守舊講のお連中さまとお見受け申しまして御定宿の固息屋は私し方でございますれ泊りなされませんか 民「何だコウ箆棒奴前方を見てものを言やアがれうんな間の抜たゝちやねへのだ苦圖〳〵言やがると尻の穴より瀛車を叩き込んで頭上の頂から煙りを出させるぞ「大きな聲で見咎ねへちやねへか宿吏なんどの云ふをにや敵手にならねへで早くお出ナ 民「だつて餘まり人を馬鹿にして居やアがるからサ 自「まあ宜いとこと民「チョッいめ〳〵〳〵い 火「へィ〳〵これはお客さまお機嫌さま宜しう大さうお元氣さまでへゝゝゝエー自分時日〳〵軒の出店で火口屋と申しますが何かお宿を願ひ度うございますへィ〳〵本宅は舊姪子屋と申す跡でございます故家屋の立派なとは他に類なしでお座敷向等も至極美麗にて其上花瓶斯なる

も引てございます　民「コウ〳〵幾程れ前か喇り立ても宿曳の嘘の兀たる憲さかなで宅へ行て見りやァ着て寐る蒲團も碌々無へやうなをだかも知れねへから其の口車には滅多にや乗れねへのだ爾して一体お前の所は何講ヲ云ふンだェ　「さやうでございます以前は低壁講と申しまして同社の申し合せが確固として居りませなんだ故終に一昨年講をば解て仕舞まして現今の處では何講と申すでもございませんが何分其頃から連續きまして少々お客筋が御座りますので矢張り共方の御用宿と申す様な講でございます然しながら是とても世間の風評にお聞きなります通り開業を致しまして時分の様には對した利益も御座いません乎為眞の外面の義理一遍で○になりますとなら仮令何講へでも加盟て見度いと存じますずいのハ自分方の性質で御坐りますがさう申す中にも古いお馴染の御愛顧甲斐には肝腎の營業が悉皆閑暇になつて參りましたを夫では活計が立めへから宿屋の傍ら掃除番をさせて遣らうとのことで先づお蔭さまと昨夜の處では雪隱の糞代の餘徳も隨分這入て來りますので苦しい時には鼻をも剝げとの譬の御坐りますれば況て貨幣故なら臭い我慢もしなけりやならぬと存じまして鼻をつまみながら糞の番もして居るやうな始末實に斯なをして居りましては迚も末の見通しも附ませぬ故到底お引立になりなけりやならないと申すもの何分何か御愛顧を以て今晩の處も兎も角御一泊の程を願ひたう御坐います　民「道理でお前の身体は何だか臭いと思ひ

だ如何に慾に眼が無へか知らねへが掃除の世話を焼たり糞のをまで手に掛るとは尾籠千萬な耻知らずさう云ふ了簡で居るから不足のねへ年齢をして居ながら客の尻から食着て庇ばかり臭で居なけりやならねへんだ鶯番兼の旅籠屋と來ちやァ鼻持のなるとちや無へから已等も泊りは小便として置う　大「大さうお素見がお上手さまで否早閉口致します情願御申戯なく弊店へ御投宿を願ひ度う御坐います〳〵〳〵即ち自分方は立憲改新講の大熊屋と申しまして同盟の宿向は御道中筋の先々にないと申處はございます第一宅にて郵便切手を賣下て居りますれば諸方への御報知には至極御便利て殊に東京横濱への毎日往復の乗合馬車を差立身潰會社の滝船も弊店で切符を賣捌き御乗客御荷物とも総て何事も同社の爲めには周旋盡力致します又お坐敷が御意に叶ひませんければわせだの方の別莊へでも御案内を致し御宿料も何分不景氣の折柄で至つてお客さまも少なうございます故精々お働らき申して置きますト申して御馳走向は決してお飽抹には致しませず据膳と申すので萬事御丁寧に仕つりますへィ〳〵最貴郎さまは是より先へお越になりましては自由講と申して過激なお取扱いを致します宿ばかりで上等の宿と申しては二軒も御坐りませんからお泊りになつた方が宜しう御坐いませう　民「さう無暗に袖を引張ちや綻ひが裂らァな宜加減に放さねへか此の頓痴氣奴過激な宿もよく出來たェヽコウ自由講の定宿に限ウちや粗暴過激などと言ふ取扱ひをするものか何時も屍放講連中が偶然一泊をして見ると大變

に繁昌をして居るので羨まゝしさの糞腹立で何でも自由講を打潰さんと乱暴な挙動を極める處から宿の方でも捨ては置れず詮術なゝにそれ相應の扱ひをするのは當然のことだりれに他の宿を悪く云て自分の方へ客を引込うとは言語同斷の卑劣人足手前なぞが風義が悪いと言ふゝだ全体宿引でお飯を食て居やアがる癖に眉毛の下に擬露ついて居るのはそら何だまさか賞牌の摸形ちやあるめへシこれに何講の客だて言ふ位の見分が附ねへテかあるものか詐だと思ふつがもねへ聞たら吃驚するだらうが抑も此方は舊自由黨の總理ではねへが其板垣君に引續いた同主義て有名の日本屋民八さまだ勇壯活潑な容貌を見たゝても大抵判りさうなもんぢやねへか　大「へゝーこれは何とも恐れ入ます成程さう伺ひます」眼尻がツンと下つて居て鼻の頭がツンと天へ高く頓馬に御上品な處がおありなすつて如何にも自由主義の文持顔がーてお在なさりますそんな雑兵を見たやうなれ繕客さまとは存じませずれ宿を願ひまーたは自分共の不注意で御坐りまーた何か幾重にも素寒貧を願ひます　民「ナニ此ン畜生通行の者を捕まへて異う詰つた其揚句素寒貧とは何の事ッたサア最了簡がならねへンだ有一館で仕込だ腕力自由の拳を食つて見やアがれ　大「否〳〵如何仕りまして素寒貧など、申まーた覺へは決ーて御坐いませんうれは御勘辨をと申まーたをお聞取違ひになりまーたのでござりませう　自「民公眞實に困らせるちやねへか幾程お前が力　だとッて宿引なんぞの口にや迚も勝てるとちやねへから打捨て置ねへと言ふと　双夫

農屋さんが新人宿取締規則を記して客を引て歩むから餘まり口が過るちやねへか大抵敗新講の客デ言ふは無理勸めに勸めて引込のが多くて心から其宿を望んで來るテ言ふ樣な客は極少ねから苦〳〵紛れに宿引も出すのだらうが承知が法律の裏を掻くとは實に太い講宿共だそれとも理屈があるなら云て見ねへサア何だよもや立派な口も叩かれめへテコウ民州そんな者にや敵手にならずと打捨て置て早く出て來ねへ　民「ヲット合点だ彼の此所な間抜野郎さまを見やアがれ已等の所の自由さんに一敗遣られてぎち〳〵ーて居やアがらア悔ーけりや臍でも嚙んで自亡て仕舞時に自由さん已等は何だか面白くなつて來て足の痛てへのも忘れて仕舞た位だか何と今晩はお宿を取ねへで一番宿引の素見と出掛たら何たらう　自「またーても入ねへ口を出ーては失敗てばかり居る癖に生氣意なをを言ひなさんなれいさうと彼所の自由燈に愛國屋と記てあるが茶店の爺さんが言つたのは多分彼所のをだらうから早く着て緩々休むと做樣ぢやねへか　民「流石に自由講の愛國屋だけだ已等の喧嘩の敵手の宿引が一人も出ちや居ねへぜ　自「其所等を思つても堅い宿引には違へ無へト話ーながらに歩む間もなく愛國屋へ着きけれゝ主個を初め家内の者が一同其所へ迎へ出て　一同「入ッーーやいれ早うございます御機嫌さま宜〳〵う毎度難有う御坐いますお茶を一喫召上りませ　主「エゝト貴郎方は御両君さまでゝ宜〳〵うございます御案内を申〳〵ー　婢「ハイー1ト答へる下婢の聲の長き廊下を打過て兩個ゝ坐敷へ通りけり

○第三編

驛中一と稱れたる自由講の愛國屋朝に去つて夕に來る多くの客の旅烏塒求め〜間毎〳〵は十八集て十種の訛り州さま〳〵の人情風姿薪を樵る筑波の老叟の峯より高き意見のあるあれば鱗ずを漁る筑紫の壯年の海より深き思慮あるあり或は愛國自由の爲めに盡す心は千松島その陸奥の慷慨家ありまたは五陵廓の雪よりも猶潔白き函館の人々あり赤心赫々とーて珊瑚と共に輝く土佐の壯士熱心凝〜て巾領降山の石ともなるべき肥州の眞英雄越後の志士蜚秋田の不羈の徒と源平藤橘の千差万別も其の精神は一致一到自由の袖の振合せ地所の緣を結び合ふ賴母子氣ある交際の酒宴も互ひに强者同士隔の襖も打明たる大盤石の思想と思想と思想睦みくつろぐ賑はーさ右ある一房には自由兵衛が今風呂場ら浴衣被け手拭片手に歸り來て見れば民八は艸臥ーか果烹る程の場に浴る間を廬生が榮花の夢ならねど五十年にも猶勝れりと大の字形に仰反て前後正体白川夜船雷に等〜き高鼾に呆れながらも傍へ寄り肩のところを搖りつゝ 自「オイ〳〵民公何ーたシだヲ眞實に做樣の無へ寢坊介ちやねへかうんなに眠けりや湯に入つて來てお飯を喫も疾く寢るが宜ちやねへか未だ氣が着ねへのかオ、民公起ねへテ串戲ちやねへぜと耳の傍にて呼覺せば俄に勃然と起上り寢ぼけ聲を振立て 民「何だ箆棒奴誰だと思ふンだ仮令腕は細くタてもまさか毛髮も擧りの無へこの身体へ繩を掛るとも出來めへざらう併ーこれも自由の爲めと思や已等の方からお賴み申すのださう言ふ難題を吐露からにやをれもだまつちやいねのへだ 自「きウ〳〵立て騷ぎ出すとは念の入た寢語ちやねへか大きな聲をーて見咎ねへ民公テばオイ民公を背面を强く打据ると始めて夢でも覺たと言ふ容子にて 民「ア痛々、、、、眞實に苛酷思めへをさせやアがつたと顏をーかめながら四邊を虐路〳〵 民「オ、自由さんかまあお前好所へ來て呉た最少ーのとで已等は捕縛られて盡了處だッタッケ 自「何を言ふンだヲ確固做ねへナハ、アちや今の騷ぎは夢でも見て吃驚れたのだヲ 民「オヤ〳〵〳〵成程それでハ夢であつたかやれ〳〵先づ一安心頭上の皿まで立退て居た睾丸が元の囊裡へ治まつて自由さんまあ聞て呉ンねへ斯言ふ始末サ前刻お前と兩個伴で此處の家へ宿り込み間もなくお前が湯に往たを思ひなさへすると子帥臥た故か已等ハ頻りと眠くなり何にも我慢が做切れなくなつて來て我知らずにこくり〳〵と舩を漕ぎ出ーて居た處へ袴羽織または洋服などを着た四五人の奴等が來て突然已等を縛らんと不意の弱身を着入る擬勢に以前ならば戰々慄々だ忽地現場で魂消て盡了清淨潔白な身でありながら人間の權利やものゝ道理を辨へて居ぬうちやあ詩の語のなーに一度は捕縛の赤耻サ處ぢ

正は未だ做ねへンだ夫とも何かを疑つて捕縛つて行くと言ふのなら出る處へ出て証明を立ま詩何も怖れるとタアねへのだサア何時でも勝手に縛つて行やアがれこの鼻猪虎野郎奴斯言やまさか毛髮も擧りの無へこの身体へ繩を掛るとも出來めへざらう併ーこれも自由の爲めと思や已等の方からお賴み申すのださう言ふ難題を吐露からにやをれもだまつちやいねのへだ 自「きウ〳〵立て騷ぎ出すとは念の入た寢語ちやねへか大きな聲をーて見咎ねへ民公テばオイ民公を背面を强く打据ると始めて夢でも覺たと言ふ容子にて 民「ア痛々、、、、眞實に苛酷思めへをさせやアがつたと顏をーかめながら四邊を虐路〳〵 民「オ、自由さんかまあお前好所へ來て呉た最少ーのとで已等は捕縛られて盡了處だッタッケ 自「何を言ふンだヲ確固做ねへナハ、アちや今の騷ぎは夢でも見て吃驚れたのだヲ 民「オヤ〳〵〳〵成程それでハ夢であつたかやれ〳〵先づ一安心頭上の皿まで立退て居た睾丸が元の囊裡へ治まつて自由さんまあ聞て呉ンねへ斯言ふ始末サ前刻お前と兩個伴で此處の家へ宿り込み間もなくお前が湯に往たを思ひなさへすると子帥臥た故か已等ハ頻りと眠くなり何にも我慢が做切れなくなつて來て我知らずにこくり〳〵と舩を漕ぎ出ーて居た處へ袴羽織または洋服などを着た四五人の奴等が來て突然已等を縛らんと不意の弱身を着入る擬勢に以前ならば戰々慄々だ忽地現場で魂消て盡了清淨潔白な身でありながら人間の權利やものゝ道理を辨へて居ぬうちやあ詩の語のなーに一度は捕縛の赤耻サ處ぢ

今日ちやこの民八も悉皆畀屈の澁れ皮が剝け石鹼に楓炭糠袋浮石や呉呂の垢擦入らず艶は自由の眞磨き透明るばかりに洗ひ拔た御膳上等無類飛切新富立女形の容顔も鏡蓋を以て之を覆ふべき柳橋藝妓の領筋も撥服紗を以て之を匿すと言ふ程で産毛一本汗一滴跪蹲の無へ精神だから自大變に手譽自慢の口演が多分過て肝腎の話〜が何だが根から解らなくなつて盡了たはナ最と箇略に話〜ねへ　民「先づ〳〵無言て聞給へ其所で已等も驚愕ながら理由も語らず不禮の擧動スハ狼藉ぞ南無三と周圍を取卷くその下を心得たりと脫つ僭りつ飄然と背後へ身をひらき柱を小楯に躰を搏へ理非も盡さぬ卑怯者何奴なればこの〜わざ容子に寄たら此分で助け歸するとならじ仔細を語れ弱虫奴等と大音上に呼はりたる鬼をも挫ぐ勢ひに其共に避易〜て一時は退き躊躇居り〜が味方の多勢を賴みと〜て再回取て引返〜斯〜て捕縛に迎ひ〜理由を聞た〜とあらば云つて聞さん卽ち其方生來の愚鈍酒器野郎の分財でありながら纔ろに自由主義をとつたとて其名を笠に博學顏虎の威を藉る狐社流の尻尾を顯せじと舌低ずり前後揃はぬ突辨にて國會道中此所彼所の田夫野人を惑溺させ己が主義へ引込んと言語工みに嘘を構へ味く說諭〜て加盟を勸め或は會〜て密事を計る容易ならざる所業ある段不埒千萬不屆至極疾くも此方の耳に觸れ〜故若〜此儀に〜て差置ば此上如何なる椿事をば惹引さんも計り知れず依て敎唆の根を斷て枝葉を枯らす手段の逮捕觀念を〜て綱に羅れ若〜それともに今より〜て狂氣の如き心を去り主張する自由を

いと人らざる民權擴張の提燈持を廢るとならば寬仁大度の沙汰をもて此場は詮議の次第で免す返答あらば卒聞ん如何に〜と言語尖くまたも詰寄る大敵を物の數とも思はぬ己等今戶橋を北へ渡れぬ世間の狹へ手前達仮令曚昧無智たりとも一寸の虫も五分の魂魄聊か國家の爲めを思へば犧牲に果すとも我日本の內輪をば此上完全たら〜めんと衆に卒先民權擴張殊に國會も鼻先へ早近づき〜今日唯今第一急務とすべきものハ其の開設の場合に於て最大必要の政黨ならずや就中各派の中にあつて屹立巍然と一際立て日に旺盛の勢力ある我自由主義を左程にまで蛇蝎の如く忌嫌ひ耳目と稱るゝ已等をば何故あつて敵と狙ふぞ不所存なる奴輩かな去る年岐阜に於て總理が遭難の其際に此板垣は斃るゝとも自由は決〜て滅びぬと言はれ〜とのあるを知らずや然れば倍々諸氏にも堅く執て毫も動かず愈々丈夫の權利を張らる萬代不朽の自由なりそれに何ぞや手前達が取るにも足りねへ痩腕もて撲滅させんと邪魔立弘くも蟷螂の爺鷄卵を以て恰かも巖に中るが如く爭か及ぶ處ならずシテ其生体は何者だ貧政黨が捕人を擬ふ死物狂ひか何もせよ手向ふ上は何奴此奴の容捨なく片ツ端から撲のめす生命が入らずば卒來れと大手を廣げて待構へるに敵も强者動する色なく言たひ儘の其の廣言今に思ひを知せて呉んそれと云さま四方より吶と一度に取て掛るに右に投付け左りに蹴倒〜或は組敷き組敷かれ此所を最期と挑み戰ふ其の形狀は宛がらに飛龍の雲を起すが如く猛虎の風を嘯くに似て霎時は雌雄を決せぬ折柄オイ民公

とお前に起され眼を覺ましたら夢であつたが何れ結局の性根場は後席の枕にたつぷりと殘りの夢を見次ぐとして鳥渡一萇　自「エ、いめ〳〵しい何のとだ下手な講釋師に狐ぐのついた樣に盧言半分の倒のれ饒舌實眞に彼なにも舌の廻るものか呆れて口が利れねへのサ斯何時までも苦圖〳〵と言て居ずに早く湯に入つて仕舞ねへ當家の下婢達が困らア子　民「眞にさうだツケども一ツ風呂へ入つて來やうト素裸躰になつて立上れば　自「お前風呂場までは大變に遠いから浴衣でも引被て行なけりや風邪を感冒アなそれとも邪魔なら瓢鼻褌丈にても締て行ねへと見咎ねへちやねへか　民「ナアニ構うとがあるものか誰が笑ふが誹謗ふが自主自由の巴等の身躰だ殊に息子の束縛も解いて遣らなけりや義務が立ねへテいふものサハヽヽヽたが自由さんエ若ー下婢がお飯を持て來たら晝間の勞れを拂ひ給へ清めて食べと鳥渡一献聞〜召たい積りだかられ神酒を分付て置て呉ンなよ宜か賴みやすぜ賴むに濡衣さアまさまかト口淨瑠理をかたりながら梁行く鼠のそれならで廊下傳ひに下りて行く跡に自由兵衛は散ばりある四邊の荷物を取片附實に世話の燒る奴ではあると呟きつゝホッと一息烟草燻らす其折柄隔ての襖を徐々開け入來る一個の書生あり自由兵衛はその者の未だ何とも判らねゝ立たる膝を行儀に直ー最慇懃に打對ひ　自「未だお見請申さぬ先生何か御用でも厶りまーてか　書「否別段用ちふ程のこともないちやが過刻より隣房に依て同友と小酌ども張りをつて失敬ながら君等の談話を襖越しに聞ちふと却々我輩如きの茨ばかるる熱心家ぢやわらーて君等兩氏を壓房へ御招待の申聊か交誼を結ぶの意を表せん爲め鄙酒粗肴ながら懇親會でも開きたいちに精神で罷り來いで我輩も舊自由黨の者ぢやから君さう頑固なことを言ふなかれ今厠房へ往をつた僕が朋友は長髪長髯の生へて恰かも關羽に髣髴ーとうるちや依て强壯活潑なる容貌の張飛然たる君及び又一人の玄德乎たる御朋友も仮令桃園ならぬも臨んで義を結ばざるを得ざるの場合ぢやから遠慮〜て何ぞ躊躇とやある左なくも三千七百萬の同胞ッ口卒來給へと手を執て是非にと强らるに否み兼件の書生の宴席に至れば〳〵饗應の準備あつて酒地肉林の待遇に最初の程は遠慮〜て居〜自由兵衛も杯盃を手すに隨ひ酩酊ーければ性質の飄輕を顯はーて酒落を交たる雜談に果は何方が主客やらそれとも判ぬ平和親睦打興じてゞ居たる處へ當家の下婢が遽だーく呼吸を切〜て駈來り　婢「アノお客さまこあ大變で厶りまず當家のれ伴さまとお隣房の貴郎さまのお伴さまとが何なすつたものか便所の前でれ兩個さんとも仰反て眩暈ーて在ッーやいますから何ぞ直お來〜なさつて下さいまーとの注進を聞より書生も自由兵衛も吃驚仰天此ゝ开も如何に若ー反對黨の所爲にあらずや但しは怪我か過ちか何にもせよ容易ならざる一大事ぢう出來せり打捨置べきとならねば卒應援に操出さんと兩個は取るものも取敢ず直ちに現場へ駈着て見れば果ぢて氣絶ー居れば水よ藥と上と下揑返ーたる混雜騷動自由兵衛は傍なる手洗鉢の水を汲取り今民八に飲さんものと不圖かの面を差覗くに正〜〳〵

民八に相違は無れど何〜たものやら面色は印度から來た石炭焚が炭團屋の煤帚に雇はれたと云ふ梅鹽〜きに眞黑なれば倍々不審の晴遣らず水を一口含ませて耳の側へ口を寄せ　自「民公ヤーーィ民八ヤーーート氣を確ろに持ねへョーーー丈夫〜ないとお前の膳の汁も肴も食て盡了ョーーーと呼生られて漸々に心附たか呼吸噴返〜切なき中にも倒の滑稽負傷者と云ふ思入にて最苦〜氣に起も上らず　民「オヽ自由さんか遲かり〜遲かり〜今宵の椿事の一伍一什まあ一通り聞て呉い頃〜も彌生の朦天薄黑暗の廊下をば風呂場にたどる途次春の夜寒の身に〜みて風邪でも感冒たかぬ嚏をすると拍子も拍子生憎とその鼻風の烈〜さに歩みの洋燈を消て仕舞咫尺も判らぬ眞の闇夜鐵砲風呂に行くも歸るも進退谷まり沸騰の浮沈あはか奇策を旋ら〜て明るい方へ須臾も速く此場を去らんと心の裏は矢猛にあせれど弓張の月さへ洩ぬ暗紛れ此等が男兒の忍耐處と我慢をする中稍とのをに遙か彼方に人聲の聞ゆるこそ天の與へと手で撫足で探りながら行くは行けども方位さへ西東ともわか狹井の呼べと應ぜぬ家内の廣さ終に巡つた揚口の果變な所へぐれ込で突然足を蹈外〜眞轉倒に轉がり落ると其所は何やら炭納屋ら〜く手に觸るものは俵のみも〜斯な所に長居は無用と太く打つた腰骨の痛さを堪へて這上り顔に引張る蜘の巣を撫除けながらたぐる間もなく便所の横手へひよつくり出たと西洋諸邦によくある倒壓制政治の下にあつて苦辛殘扱きた人民が自由世界の空氣をば始めて吸たと一般で實に蘇生の心持やれ嬉〜やと思ふ折柄場

を吹來る一迅の生臭ならで鼻臭き夜風は鼻をつんざきて鳥氣に身の毛も戦慄ばかり怪〜めき思ひつゝ見遣る傍の便所の内より顯はれ出たる一個の怪物背高き身に白衣を纏ひて長髯長髮蓬ろに乱〜百練の鏡を掛たる如き双眼嚇と見開きて當方を目掛來るさまに何かは以て驚かざらん斯程丈夫のこの己等もアッと一聲其儘氣絶已に黄泉の旅の空死出の首途と言ふところを已等の膳の汁も下物も喰て盡了と呼生られ何は兎もあれ第一の心殘りに後髮ひかるゝ切に〜て漸々蘇生たゝ何より僥倖シテ其の膳は何所にあるか早く遇せて喰させてコヽ、是自由兵衛どのと演劇を摸擬〜思入に此方も恰度一杯機嫌騒動のとも打忘れ臺詞の後を受續ぎて　自「ヤヽヽヽうんなら妖怪の所爲なり〜か今一足迅かりせば漸眩暈をもさせまじものを取逃〜たは返す〜も殘念至極の限りなれは仮令地球を一周するも此儘跡を押付て打留でやは置べきかさう言ふ中も時間が移れば些とも早くオヽさうだと走り掛るを後方より以前の書生が呼止め　書「此は自由兵衛どのには屹相變て何所へ行るゝ　自「はて知れたと妖怪の　書「跡を追ふなら最早畫餅　自「とい又何故に　書「さあ疾に仔細の判つてあれば先づ〜下に沈着てその齟齬でありー始終を心を鎮めてお聞なさればと醉ふた紛れにまた書生も混雜中で戯むるを駈着來たり〜家内の甲乙も前刻から傍で觀て居りて堪へ〜〜可笑さを思ハずフッと噴出〜立見摸擬に各自がイヨ洒落駒屋アー屁子輪屋アーーと素見聲に氣の着く三人　自「オィ〜民八奴が横笛入に異う氣取つた處から

お神酒加減に遂浮され安くは見せねへ十八番を騒動の中へ擂き出したは此奴ァ近來の大失敗だ然し先生も餘程氣がごせへやすぜ　書「君知らずか氣どもありをる筈さ之でも我輩は花方俳優で國會ぢや大演劇には屹度一當する積りぢやもの　自「ハヽヽヽヒヤ〳〵時に先生聞けと仰しやいましたは　書「其仔細ちふはノ君の御朋友が妖怪ぢやと思つたのは卽ち我輩の同伴の者で前刻もお話しの致した通り長髯長髮加るに日に焦けて居をる處へ持て來をつた眼鏡ども掛て居をつたものから〳〵て見馴ない人が鳥渡見れば魂消て盡了のも至極道理化物の生体見たり柘尾花で怖い〳〵と思ふちふと電信柱も高入道に見へるちふもンでうれ薄暗い便所の燈火位で見たのぢやから妖怪と思つて眩暈したのも無理のないちふもンだ然るに我輩の同伴の氣絶の致いた原因ちふは君の御朋友が素裸躰で顔から足まで炭だらけの眞黑な姿形を〳〵て眼ばかり蟻螻〳〵光ら〳〵をつて出會機會へヌーーと現はれたもンぢやから必定是は一時諸新聞で囂々たり〳〵彼の海坊主どもの怨靈が我輩共を倒さん爲め喰殺しに來たものかと懼怖驚愕の餘り件の始末でありをつたさうだのぢやが失敬ながら君の御朋友と言ひ我輩の同伴と言ひ否早揃ひも揃ふた臆病者では厶らンか　自「さやう〳〵實に先生の仰せの如く舊自由黨の肩書付て國會道中をもするものが臆病なのにも程のあれうれが拙者でもありましたなら自由の拳で撲のめ〳〵取て押へて捕縛り東京の牢獄へ原や大坂の千日寺前へ積送り觀物にでも出して遣りますものそれに妖怪の何者たるを見屆ぜず現場にて腰を抜して盡了とは平常の廣言を鉦太鼓で探し廻つても行方の知れぬ影薄い意氣地なさ此後は大きな面も出來めへ　民「コウ自由さんお前は怖い思へをしないのだから法螺も吹て居られるが現場に及んぢや何して却々そんな榜蒲一に行くものかしたが聞なせへ臭竟臆病で眩暈し合たこそお互ひに撲ちも打れもしなかつたもの、萬一左なけりや已でのことに大負傷となる危殆ところ無事で濟んだは何より重疊何と自由さん是だから臆病者だと言ッたつてさう只取つたやうには言はれめへテ　自「家中の人を騒がして置て臆病の自慢も出來た沙汰か玉箒して實丹や神藥テ言ふやうな氣の利た氣附は迚も分に過ぎて却つて助命も覺束なからうと思つたから汁も下物も喰て盡了と頓智卽妙で呼生けたので稍と蘇生をしたのだが若し彼儘で斃て盡了やあ意地の穢ねへ幽靈が冷飯ィとでも言て迷つて出たらうよホィ是は各さん眞にお氣をもませまして濟ません實にお聞の通りの頓馬な齟齬で一時は黃泉谷で厶いましたが先づ彼樣に減らず口が利るやうになつた譯で厶へすから情願御安心下さいますやうコウ民公お前も何とか挨拶をしねへな　民「唯今此者が申します通りの始末でへィ〳〵飛だお手數を掛ました　主「そこで漸く安堵と言ふもの若し先生貴郎のお同伴さまも別段御別條も厶いませんで厶いますか　書「ハイ是は難有うお影と謝言ども陳ないで座敷へ歸つて行て盡了た体裁ちやから最早大丈夫ちふもンぢや依て我輩が彼に代りて諸君に御厚意の程を鳴謝の致いて置ちやテ就ては自由兵衛君男兒は

當つて碎けろちふとがあるで此上の交際にて一層頼母しいぢやから一大盛宴を張り懇親會ども華美に遣つけるで兩君とも疾く弊屋に來をつて酒でも呑をらぬか　民「それは贊成大贊成是より直さま是非ともお供を　自「酒と來た日にや餓鬼も同樣眞實に困り切る男ぢやねへかまあ兎も角も湯に浴てその眞黑な身体をば洗ひ落さにや做樣がねへはな　民「成程是には一番閉口そんなら後から出掛て行から先生へ宜しく賴みやすぜ　自「オット承知と右左り別れ〳〵に民八は下婢の案内に誘はれ風呂場をさ〳〵て急ぎ行く

二十國會道中膝栗毛畢

明治二十年十月廿三日飜刻御屆

同　年十一月廿三日　刻成

（定價三十錢）

飜刻出版人　京都府平民　上田桧吉　大坂南區末吉橋通三丁目十五番地

發兌所　大坂心齋橋北詰四番地　駿々堂本店

京都四條柳馬場東へ入ル　駿々堂支店
神戸多門通二丁目　同　出張店
大坂梅田ステーション内　同　出張店
京都七條ステーション内　同　出張店
神戸ステーション内　同　出張店
大津ステーション内　同　出張店
三ノ宮ステーション内　同　出張店

X-11

205284−000−2

特52−525

二十三年国会道中膝栗毛

香夢亭　桜山／著

M20

EDV−0349